ちょっぴり聖書な映画です

Vol.2

文 / バンジョー・ナリスン

ラジオパーソナリティを務める他、映画に関する 記事を不定期に執筆している。
映画・TV ドラマのプロデューサー

映画の魅力ってなんでしょう？
人それぞれかもしれませんが、「知らなかった素敵な事を知るきっかけになった」というのも、映画の魅力だと思います。このコラムでは毎回１作品「聖書が潜んでいる」映画を取り上げ、その魅力に迫っていきます。
今回ご紹介するのは 1982 年に 日本で公開された「炎のランナー」です。第 54 回アカデミー賞で作品賞を受賞した名作なので、ご覧になった方もいらっしゃるでしょう。映画とは不思議なもので、視点を変えてみると全く違った魅力を発見できる事があります。あなたも「聖書」という視点から本作をご覧になってください。
登場人物たちの心情が、より深く感じることができるはずです。

評価

最高は 星５つ ★★★★★

「炎のランナー」

聖書のかかわり度 ★ ★ ★

満足度 ★ ★ ★

「炎のランナー」 あらすじ

＜主な出演者＞

ハロルド・エイブラムス― ベン・クロス
エリック・リデル― イアン・チャールソン
サム・ムサビーニ― イアン・ホルム

＜主な STAFF＞

監督：ヒュー・ハドソン
脚本：コリン・ウェランド
音楽：ヴァンゲリス

物語は第１次世界大戦が終わった翌年の 1919 年、主人公のハロルドがケンブリッジ大学に 入学したところから始まる。ユダヤ人のハロルドは、ヨーロッパで広まりつつある反ユダヤ主義によって自分が蔑視されていると信じていた。自分が 認めてもらうには、得意の走力を生かしてパリオリンピックに イギリス人として出場して 栄光を勝ち取るしかない。ハロルドはそのためにプロのコーチ・ムサビーニと契約する。ハロルドがムサビーニと契約したきっかけは、ある陸上選考会で スコットランド人牧師のエリック・リデルに負けた事がきっかけだった。エリックに勝てないのでは オリンピックでの優勝など 到底ありえない。大学の関係者からはプロとの契約はアマチュアに 相応しくない行為だと非難されるが、ハロルドは契約を改めず、２人３脚でオリンピック代表の座を得ることに成功する。 一方、エリックは牧師としての活動と陸上選手としての活動の両方に折り合いをつけることに腐心していた。 妹のジェニーから「走ることにのめり込んでいるエリックは 信仰をないがしろにしている」と非難を受けたのだ。 だが エリックは 走ることを やめなかった。パリオリンピックでの栄光が 布教活動にも 必ず役立つと 信じていたからだ。 ジェニーには オリンピックが終わったら布教活動に専念すると約束し、ひたすら走力のアップに努めた。当然ながらエリックも オリンピックのイギリス陸上チームに加わった。しかし、ここで問題が発生した。エリックの参加種目である陸上男子 100m 予選は日曜日に行われることが わかったのだ。牧師である以上、安息日には活動できない。そのことを選手団長に伝えるが納得するはずもなく、イギリス皇太子やオリンピック委員会の要人たちから「信仰よりも祖国と国王への忠誠が大事なのでは？」と諭される。だがエリックは「神への信仰はそれに勝る」と 拒否した。エリック、そしてイギリスチームを救ったのは チームメイトの友情だった。すでに別種目でメダルを獲得していたアンドリューが、エリックに陸上男子 400m の枠を譲ったのだ。 得意な 100m ではないが、エリックの 走力であれば優勝も狙えるかもしれない。エリックは友に感謝し、400m の出場を受け入れた。 こうしてハロルドは 100m に、エリックは 400m にそれぞれ出場した。 ２人のそれぞれの結果は？ そしてその後の人生はどうなっていくのか？

POINT

タイトルは知っているが映画は観たことがない…という人も、音楽だけは知っているはず！それほどヴァンゲリスの作曲した「タイトルズ」は世界的に有名になりました。日本でも幾多の CM や TV 番組の BGM として使用され、２０１２年の ロンドンオリンピック開会式では、本作の序盤及びエンドロールで流れたセントアンドリュースの海沿いをランナーたちが走るシーンの映像とともに、あの音楽がロンドン交響楽団によって演奏されたのは記憶に新しいでしょう。さて、本作を一言で紹介すると「パリオリンピックで優勝することを目指した２人のイギリス人ランナーのお話」ということになるのですが、そこに「人種に対する偏見」と「信仰の価値観」という重たいテーマが絶妙に絡み合ってきます。第一次世界大戦の敗戦国ドイツを中心に湧き上がった「反ユダヤ主義」ですが、戦勝国イギリスも例外ではありませんでした。ユダヤ人に対する負の偏見はハロルドの人生をともすれば暗く塗りつぶしてしまうかもしれません。 ハロルドは 得意の陸上に ストイックに取り組むことで 暗雲を吹き飛ばそうとしますが、吹き飛ばしたその先に何があるのか、まだ見つけることができません。 ハロルドを演じたベン・クロスは、力強くて自信過剰な男と見られていながら内心は自分に自信が持てないという表裏ある男をうまく表現しています。牧師のエリックはハロルドとは対極の性格といえます。清廉でポジティブ。エリックの言葉を聞いた人は感動し、浄化されます。無邪気に手を回しながら走る様は洗練されたフォームとはいえませんが、走ることが楽しくて仕方がないことがストレートに伝わってきます。そんな大好きで仕方ない「かけっこ」、そして優勝すれば得られるであろう「栄光と名誉」。それを捨ててでも彼は「信仰」を選んだのです。権威主義というイギリスの古い意識に明確な NO を突きつけた瞬間でもありました。「子供に対して安息日にサッカーをしてはいけないと諭している私が、日曜日に走れるわけがない」ふと自分を振り返ってみて、この台詞にこそばゆさを覚えるのは私だけでしょうか ww. 寄らば大樹の陰とばかり、自分の意思とは裏腹にいろんなものに巻かれていく…

この映画を観て、己自身を振り返ってみるものいいかもしれませんよ。

聖書を出典とした ことわざ

「目からウロコが落ちる」

「目からウロコが落ちる」という言葉がありますが、これは、あることを通して、なかなか分からなかったことが分ったり、真相がつかめたりしたときに使われます。
この言葉の出典は、新約聖書の使徒の働き 9：18 と言われています。
キリスト教の使徒、伝道者であるパウロは、イエス・キリストを信じる前は、当時のキリスト信者を迫害していました。ある時、パウロはイエス・キリストに出会って、一時目が見えなくなりました。その後イエス・キリストを信じたとき、目からウロコのようなものが落ちて、目が見えるようになりました。その後、パウロはキリスト教の大伝道者となりました。このことから、この言葉が使われるようになりました。

りらんママの決めたこと！

おはよ　あさだよお～
お・は・よ
ママは決めたんだ。毎朝 いちばんにママがやること。
誰よりも何よりも先に りらんの目の前にママの顔。
りらんが目がさめた時、ほら … いっつも目の前に
ママがいるでしょ！
そしたら 今日一日 安心でしょ！
だってママは２人が大好きだから ….。
りん・らん